

【研究資料】

国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料

——解説と目録——

栗田英彦

はじめに——静坐社資料寄贈の経緯

静坐社資料が国際日本文化研究センターに寄贈されることになったいきさつは、舞鶴工業高等学校教授吉永進一氏と筆者が、二〇一〇年六月に静坐社を訪問させていただいたことに始まる。これに先立って、吉永氏は三月に一度静坐社を訪れていたが、その時に現在静坐社を運営しておられる小林みどり氏およびそのご息女小林厚子氏から、後継ぎの不在のために静坐社の看板を降ろす予定であることを聞いていた。静坐社が記録されることなく消えていくことを危惧されたが、すぐに何か手を打てる状況ではなく、気にかけてつとも一旦保留している状況であった。

静坐社とは、雑誌『静坐』の発行と静坐会の主催を通じて、岡田式静坐法を現在まで伝える団体である（岡田式静坐法と静坐社

の詳細については後述）。筆者は、以前から、静坐社設立のきっかけとなった医師・小林参三郎（一八六三—一九二六）の研究をしていた。小林は民間精神療法（霊術）に関心を抱いていたため、その領域に詳しい吉永氏に連絡を取ったところ、渡りに船とばかりに返事があり、早速二人で静坐社へ訪問することになった。そこで初めて静坐社の蔵書や書類を確認させていただき、その広範な人脈を窺わせる貴重な資料に遭遇することができた。小林参三郎個人の蔵書も残されていたが、多くは静坐社設立以降の資料であった。なお、小林参三郎の蔵書の大部分は、高野山大学図書館に所蔵されていることをここで一言付け加えておく¹⁾。

未整理の資料が多く、作業は長期戦となった。二〇一一年三月の東日本大震災も進捗を滞らせることになった。結局、静坐社での作業完了までには、最初の訪問を含めた六月末～七月初頭、十月初頭、十一月末、二〇一二年二月中旬、七月上旬と計五回の

訪問を必要とした。最初の訪問の後、資料の寄贈先として国際日本文化研究センターがよいのではないか、という話になり、吉永氏から同センター教授末木文美士氏に資料受け入れの検討をお願いすることになった。日文研側では、近代日本精神史の一面を明らかにする貴重な資料として、研究資料委員会の検討を経て、二〇一〇年七月二二日のセンター会議において、正式に受け入れが決定された。これを受けて、同年一月二日、小林みどり氏・小林厚子氏・末木氏・吉永氏・筆者の五人で話し合い、同センターへの寄贈に関する最終的な打ち合わせが行なわれた。現在は日文研での作業も完了し、最終的に目録はウェブ上でも公開されることになった。

今回寄贈される静坐社資料は、静坐社蔵書の一部であり、静坐社発行の雑誌『静坐』および『静坐季刊』と他二種の雑誌、および二〇四点の書籍を含む。目録の紹介に先立ち、ここでは静坐社について解説し、資料の研究上の価値を述べたいと思う。

一 岡田式静坐法について

岡田式静坐法とは大正期に一世を風靡した心身修養法である。²⁾定められた呼吸と姿勢を保持して丹田に力を込め、ただ坐るだけという簡便なものであったが、知識人・教育者・学生を中心に多くの実践者を生んだ。創始者の名は岡田虎二郎（一九七二—一九二〇）という。彼は小学校を卒業してすぐに農業に従事

し、特に宗教に関わったり、専門教育や高等教育を受けたりしたわけではなかったが、一九〇一年（明治三四）、突如として農業を辞してアメリカへ単身で遊学（一九〇五年まで）、帰国後に東京で精神療法の看板を掲げて活動を開始した。現在知られている岡田式静坐法の形式は、一九〇八年末頃までに定められたようである。³⁾一九一〇年には雑誌『実業之日本』に静坐について記事が連載されるようになり、多くの信奉者を得るようになった。岡田は自身の静坐を東洋／西洋の二項対立の中で主張せず、日本の伝統も、明治以降の西洋文明輸入政策も一切否定して、個人のうちから湧き出る内的靈性を重視して、まったく新しい文化を一から作ることを企てた。健康法としての効果に加えて、こうした主張が、近代化の矛盾と伝統の桎梏のなかでもがく人々を惹きつけることになったのだろう。一九一一年に中心的な静坐会場となる日暮里の本行寺における静坐会が始まる。一九一二年に実業之日本社から『岡田式静坐法』（執筆者は記者であり岡田ではない）が出版され、岡田式静坐法の人気を決定づけた。その後も東京の各所で静坐会が行われるようになり、最盛期には東京だけで一二七箇所にも達し、岡田はそれらの会場を全て巡回して指導していた。⁵⁾

しかし、岡田虎二郎は一九二〇年（大正九）に尿毒症を患って急逝する。一種の健康法としても受け止められていた静坐法の指導者が急逝したことは支持者を失う大きな原因となったようである。また、この流行が岡田虎二郎という個人の魅力によっていたことも大きかった。新宿中村屋の相馬黒光（一八七六—一九五五）

は、岡田の生前は十年間本行寺に一日も欠かさずに通ったが、岡田の死後は一切行くことはなくなった。黒光は静坐法を健康法以上のものと捉えていたが、岡田以外にそれを指導できる人物はいないと確信していたのである。本行寺の静坐会には一時期後継者として、岡田の高弟であり、社会主義運動家であった木下尚江（一八六九—一九三七）が推されて指導にあたったが、参加人数の減少から結局は閉鎖されるにいたった。⁽⁶⁾

岡田式静坐法についてのまとまった研究は少ないが、断片的な言及はいくつかある。田中聡は、胸に重点を置いた西洋的な近代体育に対抗して、腹を中心とした伝統的身体への回帰を通じて近代を超越しようとしたムーブメントの一環として、岡田式静坐法を論じた。⁽⁷⁾ 静坐法を思想運動として捉えたものとして、鶴見俊輔の『現代日本の思想』は注目に値する。岡田は自分の思想を体系立てて述べることはなかったが、静坐会に集まってきた人々の提出する問題に対して推論をほとんど示さず、自ら「一段論法」と呼んだやり方で回答していた。鶴見はこれを「禪宗の方法、東洋流の観念論に発するもの」でありながら、同時に「プラグマティック」な性格を持つていた。鶴見は芦田恵之助らによって始まる「生活綴り方運動」を日本のプラグマティズムとして捉えているが、ここに岡田虎二郎の思想的影響を指摘している。そして、岡田に対して「日本の近代思想史の上で独自の思想運動をおこした人で、その与えた影響はひろくかつ深い」と評価した。⁽⁸⁾ 断片的な言及は他にも随所で見られ、例えば、「大正生命

主義」の歴史記述の中で鈴木貞美は岡田式静坐法の流行を身体や精神の健康に向かう時代背景の一つとして描き、修養主義／教養主義の側面から筒井清忠は岡田式静坐法を取り上げている。⁽⁹⁾ また、田邊信太郎は代替療法の一つに、吉永進一は近代日本の民間精神療法運動史の一部に岡田式静坐法を含めて記述している。⁽¹⁰⁾ こうした様々な観点からの言及は、岡田式静坐法の多面性と広範な影響力を裏付けていると言えるだろう。

ただ、前述したように岡田の急逝により、静坐法の運動はしばしば途絶えたものとして描かれることが多い。⁽¹¹⁾ しかし、実際には、木下尚江をはじめとして静坐を続けた弟子は少なくなく、いくつかの静坐会も継続されていた。⁽¹²⁾ その中でも特に重要な役割を果たしたのが本稿で紹介する「静坐社」である。

二 岡田虎二郎の直弟子たち

静坐社に至る前史として、まず岡田の生前における静坐実践者グループについて簡単に紹介しておきたい。⁽¹³⁾ これによって、岡田式静坐法の影響範囲を確認し、岡田死後の展開と比較することも可能となるためである。

岡田虎二郎の熱心な直弟子の中で、特に著名かつ積極的な関わりを持った人物を挙げると、先述した木下尚江や相馬黒光が挙げられるだろう。木下は一九一〇年に岡田に師事するようになり、木下を通じて黒光も静坐を始めた。黒光と夫の相馬愛蔵の経営す

る新宿中村屋は、萩原礫山、高村光太郎、中村彝、中原悌二郎といった芸術家や文学者たちのサロンとなっており、一方で、インドの独立運動家ラス・ビハリ・ボースやロシアの詩人エロシエンコの世話をしたり、頭山満とも交流を持つなど、国際的な政治運動とも関わりがあった。一方、木下には田中正造や逸見谷吉（逸見山陽堂社長）といった社会主義運動の人脈があった。中村屋と逸見邸が岡田の巡回する定期的な静坐会場となっており、このネットワークに岡田式静坐法は浸透していた。¹⁵ また、木下は、当時その著述と社会主義活動で注目を集めていたため、文学と社会運動に関心を抱く学生が静坐法に関心を抱くようになる一つのきっかけとなっていた。¹⁶

次に早稲田大学の教職員とその家族による静坐実践者グループがあった。ここには早稲田大学教授の高田早苗、天野為之、浮田和民などが含まれる。この静坐会は「早稲田正座会」と呼ばれ一九一〇年（明治四三）頃に始まった。会場は牛込の矢来倶楽部に始まり、後に宗参寺（曹洞宗）に移った。¹⁷ 当時早稲田大学教授であった坪内逍遙も熱心な静坐実践者で、当時彼が主宰していた演劇研究所「文芸協会」でも静坐会が開かれていた。島村抱月・東儀鉄笛・土肥春曙なども参座しており、高田早苗が初めて静坐をしたのもここである。¹⁸ 早稲田大学教授であった岸本能武太（宗教学者・ユニテリアン）は、同僚の浮田和民に誘われて一九一一年に早稲田正坐会に初めて参座した。彼の成長は目覚しく「静坐の天才」とも評され、後に『岡田式静坐三年』『岡田式静坐法の

新研究』（「目録八一」）を著して、静坐法の解説を行っている。本人みずから「理屈をつけるのが甘い」というだけあって、著述では、静坐の技法的な側面の解説に頁を割いており、次に述べる橋本五作の人格的成長の記録に重きを置いた著作と好対照をなしている。¹⁹ また、静坐の形式を墨守した静坐社とは異なり、自ら「動坐」を考案したりするなど比較的柔軟に静坐を捉えていた。

東京高等師範学校の関係者による静坐会は「水曜会」と呼ばれ、生徒監の峰岸米造宅で開かれた。²⁰ 先述の芦田恵之助（当時東京高師付属小学校訓導）や地理教育改革を試みた北垣恭次郎もここに参座した。²¹ 『岡田式静坐の力』および『続岡田式静坐の力』（「目録五〇、五一」）を著した橋本五作（当時東京高師専攻科生、後に鳥取県師範学校教諭・旅順工科大学教授）もここから静坐を始めている。岡田は「順調に精進する人は皆此通りの順序を経て変化するものです」とこの本に描かれた橋本の体験を一つの模範例とした。²²

教育機関関係の静坐会としては他に、東京帝国大学・旧制一高関係の静坐会（本郷西教寺）と東京商科大学（後の一橋大学）の静坐会（青山梅窓院）があった。当時の東大教授の中にも参座するものがいたが（寛克彦や福来友吉）、学生が多かったようである。卒業生は教育や研究関係に加えて、実業界へ進むものが多く、その方面でのネットワークも広がった。代表的な人物に柳田誠二郎（日銀副総裁、日本航空社長）や岡田完二郎（富士通社長）がいる。柳田は静坐関係の著述を多く残している【「目録一九三―二〇〇】。また、農本主義思想家の橋孝三郎も一高時代に西教寺の静坐会で

坐った。⁽²³⁾

他にも軍人の集まった「無名会」(会場・四谷正応寺)があり、海軍大将の八代六郎もここで坐っている。芝区にあった統一基督教会(東京ユニテリアン教会・惟一館)も静坐会場となっており、前述の岸本に加え、今岡信一良、小山東助、星島二郎など静坐するユニテリアンは少なくなかった。⁽²⁴⁾また、皇族・華族・政財界にも門人が多く、それらの人々は個別に各邸宅で静坐会を開催して、岡田虎二郎を招いていた。⁽²⁵⁾

三 小林参三郎と濟世病院

前述の静坐会は全て東京で開かれていたが、岡田の故郷である愛知県田原市の静坐会(教育者の伊奈森太郎らが中心)をはじめとして、岡田の出向する静坐会は地方にもあった。京都の濟世病院における静坐会もその一つであった。この濟世病院静坐会が後の静坐社へと繋がっていく。ここでは、静坐社に至る経緯として濟世病院とその院長・小林参三郎について述べておく。⁽²⁶⁾

濟世病院は、一九〇九年(明治四二)に真言宗各派有志の宗門改革組織「祖風宣揚会」の企画によって京都東寺(教王護国寺)内に設立された慈善病院で、その後全国に設立された仏教系慈善病院の先駆けとなった。慈善事業の観点に加えて、宗教的治療と科学的治療を併用するという参三郎の治療方針が人々の耳目を集めていた。ここでいう宗教的治療とは、仏教(真言宗)の要

素を取り入れつつも、その中心的理論において民間精神療法(靈術)のムーブメントに大きく影響されたものであった。実績のある医師によるこうした取り組みは、宗教と科学の調停として、あるいは新たな科学として期待されてもいた。例えば、開院の際に教育学者の谷本富は、小林の靈術的治療論を「新心理学」として全面的に肯定する講演を行った。また、海外にもこうした治療方針と病院経営に関心を持つものがいた。詩人のタゴール、フェビアン協会のシドニー・ウエップが濟世病院を訪れて参三郎と交流し、仏耶一元論を唱えたゴルドン夫人(一八五一―一九二五)は濟世病院に寄付するだけでなく、自らも入院を希望するなど信仰治療にも大きな関心を示していた。メリマン・コルバート・ハリス(メソジスト監督教会宣教監督)からは濟世病院を支持する書簡と寄付があった(寄贈書の中にハリスから献呈された本がある【目録一九二】)。

岡田虎二郎に会ったのは、夫人の小林信子(二八八六―一九七三)が先であった。一九一二年(明治四五)九月のことである。東京における静坐法の盛況を知った参三郎は、信子の帰省の折に岡田に会ってくるように言った。信子は当時の中心的な静坐会場であった日暮里の本行寺へ行き、直接岡田から静坐の手ほどきを受けた。静坐によって大変快適な気持ち味わった信子は、その後も本行寺に通い、岡田に付いて四谷正応寺、宗参寺、ユニテリアン教会などで行われていた静坐会にも参坐した。京都に戻って参三郎に静坐の効果を伝えると、彼も病院の暇を見つけて上京、岡

田の元で参坐した。自身の持病であった神経衰弱の回復もあって、参三郎は濟世病院の治療として静坐を用いるようになった。一九一三年（大正二）から毎年夏と正月には岡田を京都に招いて、濟世病院や各所で静坐会を開くようになった。一九二三年には、参三郎の依頼で信子も濟世病院の静坐指導を手伝うことになったが、彼女はこの依頼に大きなやりがいを感じていたようである。ちなみに、濟世病院の静坐会には真溪派（中外日報社主）や伊藤証信（無我苑創始者・この時は中外日報社友）も参加していた。⁽²⁸⁾

静坐に傾倒する一方で、小林参三郎はこの頃から浄土真宗僧侶らと積極的に交流を持つようになった。元々、濟世病院開院前に開業していたハワイで浄土真宗本願寺派の開教監督・今村惠猛の感化を受けて仏教に関心を持っていたが、その後も弘法大師信仰に注目するなど、その関心は浄土真宗に限ったものというよりは、民間精神療法にもつながりうるような広い意味での仏教信仰だったと思われる。⁽²⁹⁾しかし、精神力や信念を必要とする精神療法の方向性から、身体技法に特化した岡田式静坐法に移行することで、信仰の問題を直接治療に関わらせる必要がなくなっていく。参三郎にとって、信仰を核とした「宗教」は治療とは切り離された「安心」の問題を解決するものとなっていた。⁽³⁰⁾そこで、小林の宗教的渴望にうまく答えたのが、浄土真宗僧侶たちであったようだ。小林夫妻は、近角常観の求道会館にも通ったが、より身近な京都の真宗僧侶らと非常に親密な交流を持つようになった。それが、足利浄円【目録一三一―一五】、山辺習学【目録一八九―

一九〇】、金子大栄、蜂屋賢喜代【目録四六一―四七】といった人々であった。小林夫妻は、熱心に彼らの話を聞き、その聴聞の場は月一回の法話会「みのりの会」として継続されていた。「みのりの会」では、前述の人々に加え、羽溪了諦なども法話を務めたようである。静坐社設立後も継続し、一九四〇年には「みのりの会」主催で「紀元二千六百年」講演会（聴衆二千人）が開かれた。講演の記録は『仏教の諸問題』として刊行された。⁽³²⁾

四 静坐社の設立

先述のように岡田虎二郎の死後、東京での静坐会は激減した。しかし、小林参三郎自身は、岡田がいつも、「命は天に任せて最後の息まで育てられるのが静坐だ、柿の実が熟しきって落ちるように」と言っていたことを引き合いに出して、「よし、自分は先生の仰せの通り精進して、柿の実が熟しきって自然に落ちるように」とさらに静坐に励んだ。⁽³³⁾彼は、静坐を用いた濟世病院での治療の成果を、春秋社から一九二二年（大正一一）に『生命の神秘』、その二年後に『自然の名医』として発表した【目録九〇、九一】。ちなみに、この時、春秋社と参三郎を繋げたのが西田天香（二燈園創始者）であり、その時の担当編集者が木村毅であった。これらの書物の反響は少なくなかったようである。倉田百三は『生命の神秘』を読んで、参三郎の静坐治療を熱望し、濟世病院を訪れて入院している。⁽³⁴⁾また、英文学者の寿学文章は

もつとも影響を受けた書物に『生命の神秘』を挙げている。⁽³⁵⁾

小林は大正一五年一〇月二八日に亡くなる。自身が生前から公言していたように「柿の実が熟して落ちるように」、病床につくこともない、突然の死であった。彼の葬儀では、追悼文集『柿の実』【目録一二】が作成され、山辺、足利、金子、蜂屋に加え、梅原真隆（真宗僧侶・仏教学者【目録一八六】）、神田豊穂（春秋社社長）、成瀬無極（京大教授・ドイツ文学者）、清瀧智龍（済世病院主事）、山口葉（済世病院副院長）が小林の追憶を寄稿し、木村毅が彼の小伝をまとめた。

参三郎亡き後、信子はしばらく床に着くが、実家の東京に戻らずに京都にとどまり、参三郎の意志をついで、昭和二年（一九二七）、静坐社を立ち上げることを決意した。静坐社の主な活動は雑誌『静坐』の発行である。『静坐』の巻頭にある趣意書を紹介しておこう。

私共同志集まりて「静坐」という雑誌を発行し、いささか保健と宗教芸術等との関係について攻究し、体験して行きたいと存じます。

静坐法は故岡田先生の創建にかかり、次いで故済世病院長小林ドクトルは進んでその得意とする所の医術の上から発明せられる所多く、それが如何に多くの同胞を裨益せられたかは、その著「生命の神秘」や「自然の名医」が明らかに報告する所であります。

私共は故ドクトルの追悼の一事業としてこの雑誌を刊行し、延いては各地における同志の方々との連絡を取りたいという念願に燃えているのであります。

どうぞこの趣意に御賛同の方々は、私共のために一瞥の力をお添え給わらんことをお願いする次第であります。

編集は小林信子が行い、印刷は足利浄円の経営する同朋舎が行った。発起人には、蜂屋賢喜代、田坂養吉、成瀬無極、山辺習学、山口葉、二荒芳徳（伯爵）、足利浄円、清瀧智龍が名を連ねている。また、執筆者には、上述の人々に加え、金子大栄、倉田百三、木村毅、竹島茂郎（教育者【目録一八〇】）が発刊時に予定されていた。その後、岸本能武太、橋本五作、西田天香、真溪涙骨、芦田恵之助、井上嘉三郎（岡田虎二郎の弟）、佐藤通次（ドイツ文学者）、角田柳作（日本文化研究者）、上野陽一（心理学者・産業能率学校創設者）、中川与之助（経済学者）なども執筆している。雑誌『静坐』は初め月刊誌として発行されていた。一九四四年二月から一九五二年四月までは戦争の影響で休刊する（不定期で数号刊行はされている）。一九五三年五月から再開し一九六一年一〇月まで月刊として続き、一九六二年四月からは季刊として発行され、二〇〇七年まで続いた。

静坐社には多くの人々が関わったが、特に中心となったのが前述した四人の真宗僧であった。金子大栄は当時のことを以下のよ

うに回想している。

……その先生（参三郎）が亡くなられてからは、信子夫人によって静坐道は続けられました。その初は『静坐』の発刊であったと思います。その頃、蜂屋賢喜代、山辺習学、足利浄円という静坐道では本科卒業の先輩がありました。それに私を加へて四本柱と頼まれていたのであります。⁽³⁶⁾

この四人の他に安藤州一【目録二一七】、羽溪了諦、梅原真隆、名畑応順、阿部現亮、岩見護【目録七二】、山口益らも浄土真宗関係で静坐社において参坐した人々である。⁽³⁷⁾ 静坐社では、個々人の宗教的信仰は決して強制されることはなかったが、こうした真宗僧らの関わりから、その色合いが必然的に強くなった。例えば、一九三五年より親鸞聖人報恩講が、小林信子の個人的催しとはされてはいたが、静坐社の恒例行事となった。

五 静坐社の活動

『静坐』誌の発行を通じて、静坐社は個別に開催されていた全国の静坐会を結びつける役割を果たした。一九三二年の静坐案内を見ると、東京（七）、京都（二）、大阪・神戸（三）、その他の地方（二二）、大連（二）、朝鮮京城府（一）、台湾台北市（一）、満州長春（一）の静坐会の場所と開催曜日についてまとめられており、この中には先述の峰岸の「水曜会」や岸本能武太の静坐会や橋本五作の旅順工科大学での静坐会などが含まれている。こう

した地方静坐会とのつながりによって、各地から様々な資料が寄せられることになった。地方の静坐会や静坐人からの寄贈書は今回の目録でも多くを占めている。その中でも一言触れておきたいのは、柳田誠二郎が携わった東京静坐会で活動した森田繁治による謄写版の資料である【目録一〇二—一六】。後に出版された笹村草家人編『静坐——岡田虎二郎その言葉と生涯』（無名会、一九七四年）は森田の資料を元にしており、その意味でこの資料は静坐研究において重要である。⁽³⁸⁾

静坐社（小林信子の自宅）においても、週四回静坐会が行われ、さらに座談会も月一回開催された。座談会は足利浄円を中心として行われ、静坐に関する質疑応答を中心としつつ、静坐と宗教（仏教）の話題に進むことが多かった。大きな年間行事としては七月または八月の三日間、夏季静坐会（会場・京都女子高等学校）が開催された。これには橋本五作を指導者として招聘しており、積極的に岡田虎二郎の正統を取り込もうとする静坐社の姿勢を表しているように思える。橋本が一九三二年に急逝したのは、竹島茂郎が指導に当たっている。もう一つの年間行事は、岡田虎二郎・小林参三郎の追悼静坐会である。こちらは十、十一月に行われた。

また、静坐社は記念イベントや記念出版を行い、岡田虎二郎の顕彰や静坐の興隆に努めた。例えば、一九二九年（昭和四）には静坐社の企画によって岡田の記念塔が、岡田の生まれた愛知県田原市に建立された。また、一九三七年（昭和一二）には、生前の

岡田に接した人々から岡田の話した言葉を集めて、『岡田虎二郎先生語録』【目録八九】を編集、刊行している（目録にあるものは第九版）。一九三九年（昭和一四）には、「岡田先生二十年祭追慕講演会・記念静坐会」と題したイベントを京都旭会館および東本願寺釈穀邸にて開催し、足利浄円、伊奈森太郎、佐藤通次、山辺習学、上野陽一、木村毅、二荒芳徳による講演が行われた。この時の講演内容は『静坐の力』【目録八五】として刊行されている。

静坐社は、これらの活動を通じて、個別的な静坐会をネットワーク的に結びつけ、静坐について語り直し、岡田亡き後の静坐法のムーブメントに再び輪郭を与えていった。この過程において、静坐法の形式を厳密な形で維持して、岡田虎二郎の正統を守ろうとする小林信子の意志はムーブメントを貫く核となっていた。

六 静坐社に集う人々

前述のように静坐社は浄土真宗系知識人の関わりが深かったが、関係者はそれだけにとどまらない。例えば、昭和初期に成瀬無極を中心とした脚本朗読の会「カメレオン」が小林邸で行われた。新村出（言語学者・広辞苑編纂者）夫妻、山本修二（英文学者・演劇学者）、龍村平蔵（龍村製織所二代目）夫妻、伊吹武彦（フランス文学者）などはこちらを通じて静坐社と関わった。他に、静坐社以前の交流ではあるが、小林信子は上田敏夫妻と交流があった。歌人の五島茂・美代子夫妻との交流もあったようである。画

家の瑛九との関わりもある。彼の兄・杉田正臣（従心）は、京都医専の学生だったところに虎二郎の元で参坐し、また済世病院で宿直医をしつつ参三郎に静坐指導を受けていた。後に故郷の宮崎県に戻って実家の眼科医を継ぎ、医業と静坐の他に俳句やエッセイでも知られた地方の文化人となるが、この兄の影響で瑛九も静坐をしている。昭和十三年頃から特に熱心に坐り、京都の静坐会にも参加していた【目録五九一六二、七六、一六八、および雑誌『眠りの理由』】。

また、学生の参坐も多かった。一九三一年（昭和六）まで吉田神社にて毎日京大静坐会があり、旧制三高や京都帝国大学の学生の参座があった。こうした繋がりで静坐を知った人々に、西元宗助（教育学者）、横山慧悟（医師）、佐藤幸治（心理学者）などがいる。何人かの学生にとって、仏教（浄土真宗）への関心が、浄土真宗系知識人を擁する静坐社への関心と繋がっていた。典型的な人物に、前述の西元や玉城康四郎（仏教学者）などがいる。佐藤幸治は後にヨーガや岡田式以外の呼吸法や坐法にも関心を持つようになった。岡田に直接師事したこともある佐保田鶴治（インド哲学者・ヨーガ研究者）との共著を含め、こうした身体技法・心理療法に関する著作を多く出版した【目録一三八―一四二】。横山慧悟は、後に森田療法と静坐法を併用した心身症・神経症の治療法を自身の病院で実践し、その研究と実績を著作にまとめている【目録二〇二、二〇三】。

鈴木大拙と静坐社の関係にも触れておきたい。明治末、鈴木大

拙の師であった釈宗演は釈宗活などとともに禅を一般に開放して、近代の中での禅の展開を模索していた。そうした中で座禅を静かに坐することと捉え、キリスト教にもイスラームにも見られるものとして普遍化しつつ、修養法として体育や徳育にも効果的であると説くこともあった。⁽⁴⁵⁾ その時期に、禅の伝統とは一線を画してさらに一般化を押しすすめた坐法を提唱して、多くの人々の注目を集めていたのが岡田虎二郎であった。つまり、釈宗演らの禅と岡田式静坐法は競合関係にあった。岡田は釈宗演を「酒がなくては暮らせないようでは駄目だ」と批判していた。⁽⁴⁶⁾

しかし、静坐社の時代には状況が異なっていた。例えば、以下の小林信子の回想を見てみよう。

鈴木大拙先生のところへ坐禅を習いに来る外人が苦しくなつたと先生に訴えると、先生は私のところで静坐を学ぶようにすすめられました。鈴木先生のお弟子ミセス・エバレットは、坐禅で苦しくなつて静坐を習いにいらして、よくなり、この方の発願で神月老師の八幡の外人禅堂へ入堂する人は、ミセス・小林のところまで二週間静坐してから禅堂へ行くという事になりました。⁽⁴⁷⁾

ここでは、少なくとも静坐社と大拙周辺の禅師の間では、静坐と坐禅が競合から棲み分けの関係へと移行したことが窺える。つまり、悟りを得るための坐禅に対して、その過程で禅病などになつ

た際に有効な静坐、というわけである。この棲み分けは白隠の『夜船閑話』『遠羅天釜』における禅そのものと内観法や軟酥の法の区別とアナロジカルな関係になつている。この変化に関して、静坐社の側では、小林参三郎が静坐を仏教(宗教)とは切り離して医療に用いたことが、一つの大きな要因になつているように思う。もちろん、禅の側での変化も重要であり、それを明らかにすることは近代禅宗史の一環として重要な課題だと思われる。いずれにせよ、ここでは鈴木大拙や神月徹宗【目録九三】などの臨済宗関係の人々とも静坐社は関係を持っていたことを確認しておきたい。

七 静坐社と国際的人脈

静坐社目録には多くの洋書が含まれていることから分かるように、小林参三郎と小林信子の周辺には、海外経験のある仏教者や東洋思想シンパの外国人が多い。参三郎の留学や夫妻のハワイ在住といった海外経験が、そうした人脈を築く重要な基盤となつたのだろう。⁽⁴⁸⁾

海外経験のあつた仏教者では、先述した今村恵猛以外にも、ロサンゼルスで開教活動を行い、帰国後はビアトリス鈴木と共に神智学ロッジを結成した宇津木二秀【目録一八七、一八八】⁽⁴⁹⁾、シアトルに滞在し帰国後は足利浄円に協力して雑誌を発行した中井玄道【目録一一八】、ロサンゼルスで社会活動を熱心に行った泉田準城

【目録一七八】がいる。彼らはすべて西本願寺派で（ただし後に足利は木辺派、泉田は大谷派に転派している）、足利をはじめとして信仰復興や教団改革的な傾向を持つものが見られるのは興味深い⁽³⁴⁾。

海外からの仏教シンパでは、静坐社設立以前の例として、先述したように済世病院の信仰治療に大きな関心を示したE・A・ゴルドン夫人がいる。彼女は、マックス・ミューラーに師事し仏教、キリスト教の一元論を唱える宗教研究者でもあり【目録四三―四五】、高野山に景教碑のレプリカを建てたことで知られる。

小林信子の人脈で最も世界的に有名な人物は、生涯の親友となったミラ・リシャール（二八七九―一九七三）であろう⁽³⁵⁾。彼女はトルコ人の父とエジプト人の母の間にパリで生まれて育つ。絵画を学ぶ一方で、神秘的な関心が強く、オカルティスト、マックス・テオンに弟子入りしていた時期もある。夫の霊性思想家ポール・リシャール（一八七四―一九六七）と共に一九一六年から二〇年まで日本に滞在し、この間、リシャール夫妻は大川周明や北一輝などと交流している。夫妻が京都に滞在していた時期、ミラが最も個人的に親しくしていた人物が小林信子であった。二人は離日した後、ミラはボンデイシェリのオーロピンド・アシラムに入り、オーロピンド・ゴシシュ（一八七二―一九五〇）の霊的パートナーとなって「マザー」と呼ばれるようになる⁽³⁶⁾。その後も二人の交流は続き、一九五九年（昭和三四）、信子はミラに招待されてアシラムに二カ月間滞在し、そこで静坐を指導した⁽³⁷⁾。本目録にあるオーロピンド関係の

書籍は、こうした交流の中で信子に寄贈されたものである【目録三五―三八、九六、一三七、一六三―一六六および雑誌 *Bulletin of Sri Anubindo International Centre of Education*】。

本格的な仏教実践者では、ビアトリス鈴木⁽³⁸⁾の著作も残されている【目録一七〇】。ビアトリス以外では、彼女と交流があり、参禅も行った外国人女性作家リリー・アダムズ・ベック、本名エリザベス・ルイザ・モレスビー（一八六二―一九三二）がいる。海軍大将ジョン・モレスビーの娘として生まれ、エジプト、インド、中国、チベット、日本などを旅した後、一九一九年からカナダに住み著述業を始めた。リリー・アダムズ・ベックの名前を使って東洋の神秘主義について、E・バーリントンの筆名を使って歴史ロマンス小説の著述を行っている。そして仏教を含む東洋の哲学や宗教についての著述を行った【目録一七一―二一、一〇〇】。最終的に彼女は夫とも別れ、秘書のヘレン・ヘイズとともに京都に滞在し、そこで亡くなった。その間、ビアトリスらとともに神月徹宗の元で参禅し、信子に教えられて静坐も経験した⁽³⁹⁾。

アダムズ・ベックは、小林信子の『枕草子』英訳にも関係している。元々彼女は、第一次世界大戦の頃に大谷大学の留学生としてイギリスに滞在していた山辺習学とともに親鸞の『浄土和讃』を英訳した。これが後にイギリスの出版社ジョン・マレーから東方知識叢書（*The Wisdom of the East*）の一冊として出版された【目録一五八】。一方、小林信子はこの頃に『枕草子』の英訳を完成させており、山辺はそれを同じく東方知識叢書の一冊として出

版することを勧めた。この時に、アダムズ・ベックはその英文の添削を行い、出版された小林信子訳の『枕草子』(The Sketch Book of the Lady Sei Shonagon)の序文を書いている【目録一五〇】。この時の添削に関する書簡のやり取りが静坐社に残っており、比較文学・翻訳研究の資料となると思われる(書簡は静坐社に所蔵。電子化済)。小林信子作の『枕草子』英訳の経緯については、木村毅が詳しく記述しているが、木村自身もこの出版に関わった一人であった。『源氏物語』を英訳したアーサー・ウェイリーによって『枕草子』の抄訳が計画されることを知った信子は、自分のものを下訳として使ってくれるように頼むことを、ちょうどイギリスに遊学しようとしていた木村毅に頼んでいたのである。木村はウェイリーに会ったが、ウェイリーの英訳はすでに印刷まで進んでいたため、ウェイリーからは別途出版することを勧められた。ちなみにヘレン・ヘイズの翻訳による『西遊記』も東方知識叢書から出版されている【目録五六⁽³⁶⁾】。

先に紹介した「ミセス・エバレット」もアメリカ仏教史上重要な人物である。⁽³⁶⁾彼女は、ルース・フラール・エバレット(後にルース佐々木、一八九二―一九六七)といい、一九三〇年、夫や娘とともに初来日し、鈴木大拙・ビートルス夫妻と出会い、神月徹宗の元で参禅した。伝記には、この時に彼女は鈴木大拙から、初心者の座禅(beginner's zazen)として、精神を統御するための坐法と呼吸の技術を指導された⁽³⁷⁾とある。これはおそらく静坐のことを示しているのだろう。その後も、アメリカと日本を往復しながら、

アメリカ仏教協会(Buddhist Society of America)をニューヨークで運営していた佐々木指月(釈宗活の弟子)に協力するなど、禅の普及に尽力した。彼女は弁護士⁽³⁸⁾の夫エドワード・エバレットと死別した後、一九四四年に佐々木指月と結婚、佐々木の死後もアメリカ仏教協会の運営に関わり、戦後は京都に在住し大徳寺龍泉庵を再興し、その他、禅関係の著述や翻訳を行った【目録二八】。さらに目録には、アメリカでの禅と仏教の普及に功績のあったドワイト・ゴダード(一八六一―一九三九)からの寄贈書もあり【目録三九―四二】、小林信子と交流があったと思われる⁽³⁹⁾。

以上のように、小林信子は、戦前の京都における海外仏教者(あるいは東洋思想シンパ)のネットワークのハブの位置にいたといえる。

八 戦時下の静坐社

十五年戦争が進むにつれて、他の多くの出版物がそうであったのと同じように、『静坐』の紙面でも国家主義的な言辞が増えてくる。ただ、それは、静坐社が組織としてなんらかの明確な方針を打ち出したというよりは、個人が時代状況の中で静坐の意義を提示しようとした結果であったように見える。それゆえ、そうした言辞の語り方や強弱は論者によってばらつきがあった。ただ、一九三九年の「岡田先生二十年祭追慕講演会・記念静坐会」の論調が、時局の影響を多分に受けていたことは否めない。この直前

に独ソ不可侵条約が締結され、世界情勢は混迷していた。講演会では、寛克彦の影響を受けた二荒芳徳が最後の演者を務め、西洋文明と東洋文明の合流点における日本の道徳的使命として「八紘一字」を説いて幕を閉じた。しかし、この時の二荒はそうした仕事を成し遂げるために腹の力が必要だとは説いたが、静坐法そのものが日本的であるとは論じていない。⁽⁵⁹⁾

一方、身体技法そのものから独自の国家主義・皇道思想を唱えたのが、ドイツ文学研究者の佐藤通次（一九〇一—一九九〇）であった。⁽⁶⁰⁾ 彼は「岡田先生二十年祭追慕講演会・記念静坐会」で共に登壇した演者に比べると一世代若く、岡田虎二郎にも直接師事していない。佐藤は一九二六年（大正一五）京都帝国大学を卒業後に、九州帝国大学に講師として赴任（後に助教）、そこでドイツ文学の教授で岡田虎二郎の直弟子でもあった小牧健夫と出会い、岡田式静坐法に取り組むようになった。彼は小牧と語り合いながら自身の国家主義的身体論を形成していき、一九三六年（昭和一一）から、『静坐』誌にその所感を発表しはじめた。そして、一九三九年（昭和一四）に『身体論』を刊行する。

その本の中で、彼は西洋哲学において「身体」が常に所与的・客体的存在であることを批判、「身体」を「体験の主体たる行為的自己の「格相」を含むものとして捉えなおそうとする。彼の議論の出発点には現象学があり「身体はノエマ的に観察されて尽きるものではなく、ノエシ的に自覚されるものでなくてはならぬ⁽⁶²⁾」と述べ、身体の主体的側面と客体的側面を統一的に捉えよう

と試みた。佐藤によれば、生物的生命体である「肉体」が、無生物の「物体」を含むように、「身体」は自主的な霊的生命体であると同時に、被動的立場を宿す「肉体」である。この三つは互いに不可分であるため、「身体」が完全に主体性を実現するためには、「肉体」が自己の主体性を徹底的に貫かれなければならない、とされる。⁽⁶³⁾

ここから、佐藤は身体技法の実践論に向かう。姿勢と呼吸という「ミズカラ」の意志によって、「オノヅカラ」なるもの——重力に支配される物的自己や生理機能によって支配される肉体的自己——をコントロールすることで、身体的自己として一つになる。その時に、身体を中心となるのが「丹田」であるとされた。⁽⁶⁴⁾ そして、これを為し得るのが「日本風の坐法」であり、岡田式静坐法はその最後の完成であるという。⁽⁶⁵⁾ ここにおいて、身体論的哲学の普遍性は、「日本的」身体技法に漂着する。

人が「身体者」として完全に主体性を発揮した時、「オノヅカラ」なる個の立場を超え、公的存在になると佐藤はいう。⁽⁶⁶⁾ つまり、彼の言う「主体性」とは個を超えたところから来るものであり、ここで個人的な身体論が国家論に繋がっていくことになる。彼は、身体の本質は「民族の生・国家の生」においてのみ発揮されると断じる。その理想とされる身体観が国家に当てはめられた時、天皇を「我が日本の丹田」として一君と万民が一如となる「神国日本」が構想される。翻って、「部分の一が全体の一の顕現垂迹となる」ため、「身体のこの一点を掴む丹田息は、まさしく、神

国日本を肉体をもつて行ずるもの」だといふ⁽⁶⁷⁾。静坐同人はそれぞれの方で、国家や戦時下の状況と静坐を結びつけたが、有用性を超えて、丹田息自体が「忠」を行ずることであるという佐藤の『身体論』は国家主義的静坐論の一つの究極であった。

興味深いのは、この静坐論が海外にも輸出されていたことである。ドイツのキール大学哲学・心理学教授であったカールフリート・フォン・デュルクハイム（一八九六―一九八八）によってである。彼は、一九三八―一九三九年、および一九四〇年から敗戦まで、外交官として来日、ナチズムのプロパガンダの役割を果たしつつ、日本文化に関心を持って積極的に学ぼうとしている。京都に滞在した時には、中川与之助の紹介で静坐社を訪問して熱心に静坐を行った。戦後、彼は一時巣鴨プリズンに勾留され、静坐社と連絡が取れなくなったが、後に鈴木大拙がスイスに行ったときにデュルクハイムと出会って、音信が再開した。一九五六年には、ドイツ語で『腹——人間の中心』という本を出版、その中には岡田虎二郎の言葉と佐藤通次の『身体論』の抄訳を掲載した。この本で、彼は、日本文化を事例としつつ、腹を全ての人間の生活において重要な要素であると論じて、より普遍的な方向へ議論を進めている。そうした思想に基づき、ドイツで「トモス・リュッテ実存心理センター」を設立して、心理療法を開始した。ここでは、「存在の根源」として「ハーラ」、つまり腹が強調されている⁽⁶⁸⁾。

おわりに

岡田式静坐法には、特別な教義や信仰対象もなく、元々個人的な実践が基礎となつているため、必ずしも組織の必要もない。それゆえ、静坐社のような組織的活動に懸念を示す人々もいたと思われる。例えば、木下尚江や相馬黒光のグループの人々は静坐社に対して交流を持つことはほとんどなかったようである（静坐社側は木下が亡くなった時には追悼記事を出すなど、一定の敬意と関心を持ち続けており、木下の著作も所蔵していた【目録七九、八〇】⁽⁶⁹⁾）。しかし、語録の発行や記念行事の開催によって、岡田式静坐法の正統を定め、その維持と普及に努めたという点で静坐社が静坐法のムーブメントに果たした役割は大きい。さらに重要な点として、静坐社が宗教者、文学者、学生など知識人の交流的文化的なサロンとして機能していたことである。集まる人々の傾向に違いはあるが、岡田在世中の中村屋のような性格を持っていた。これによって、そうした知識人のネットワークに静坐を広めていくことになったと同時に、彼らによるそれぞれの立場からの静坐解釈を生むことになった。『静坐』誌は、こうした文化的交流と思想的展開を跡づける格好の資料となっている。

その一つとして、真宗僧たちの静坐への関わりは注目すべき点である。現在、近代仏教史研究において、近代仏教を思想史のより広い枠組みで位置づけなおす試みが進んでいる。また、その試

みと関連しながら、「ピリーフ」(教義信仰や内面的信仰)中心の近代仏教史理解への反省が起こっている。^{②⑥} 仏教の「近代化」の指標を内面的信仰に置いた場合、必ず名前が挙がるのが清沢満之の精神主義であった。金子大栄や山辺習字は清沢満之の浩々洞の同人であり、金子は近代真宗学の主唱者として知られ、山辺は戦時下に大谷大学学長を務めた。しかし、「ピリーフ」中心の近代仏教史観を相対化しつつ、仏教史をより広い思想史の枠組みから捉えた場合、彼らによる行的な静坐実践や静坐社との関わりをどのように考えるのか、という問いは吟味しておく必要がある課題であろう。もちろん、それは真宗僧に限ったことではない。鈴木大拙や真溪涙骨など仏教系知識人たちの言説を、これまで見えていなかった岡田式静坐法と静坐社という視角から、もう一度捉えなおしてみる作業は重要だと思われる。

さらに、このことを静坐社の国際的な交流についても考えるならば、トマス・ツイードのいうトランスロカティブな歴史記述という視座は有効だと思われる。ツイードは以下のように述べる。

筆者は、……「トランスロカティブ」という造語を、歴史分析において、国家を研究上の基本単位として論究しないことを示すために用いている。というのは「グローバル」や「トランスナショナル」といった地理把握では最適な理解が得られないからである。筆者の理解では、グローバルという用語には、普遍化や均質化への絶えざる衝動といった意味が含ま

れているが、本稿で描き出したような複雑な(文化的)潮流は、あらゆる所に届き、またあらゆる物を均質化するわけではない。逆説的ではあるが、こうした潮流はグローバルではなく局地的であり、連続性と同じくらいに不連続性を生むのである。^{②⑦}

ツイードはこの言葉を、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてネイションを超えて変化した宗教的な思想の潮流——スエーデンボルグ主義や神智学をはじめとするオカルト思想の世界的な展開——の中で、宗教的真理を探究していた鈴木大拙とA・J・エドマンズとの交流を分析する際に用いている。同様に、静坐社とエバレットやアダムズ・ベックやデュルクハイムとの交流をトランスロカティブな分析から捉えてみる必要はありそうだ。それは確かに局地的であったし、岡田虎二郎の正統を維持しようとする小林信子と東洋的行法を求めていた海外の体験者の静坐をめぐるまなざしは不連続であったが、同時に海外仏教者も岡田式静坐法も既成の宗教や国境を超えて宗教的真理を追究するという潮流の中にあった。そして、その先に佐藤通次の身体論があり、その周辺に真宗知識人がいたという事実は、「国家主義」や「日本仏教」を再考していくきっかけの一つを提供しているだろう。

今回寄贈された静坐社資料は、現在まで続く岡田式静坐法の展開を跡づけていると同時に、トランスロカティブな歴史記述の可能性を開く貴重な資料である。本稿では近代宗教史(仏教史や霊

性思想史)の観点からの可能性を示したが、近代教育研究や近代文学研究、あるいは医療史などの観点からも有用なものを含むと思われる。静坐社の趣意書に、静坐と「保健と宗教芸術等との関係について攻究し、体験して行きたい」とあるように、静坐社そのものが分野の交流の舞台となっていた。本目録が、そうした幅広い研究の一助となることを期したい。

注

- (1) 木村毅「小林文庫その他」『静坐』第二巻第五号、一九二八年、一六一―一八頁。小林参三郎の蔵書は、大正一四年に高野山大学に売却されたと思われる。高野山大学図書館で小林の蔵書だったと思われる書籍をチェックしたところ、「小林蔵書」印の上に、高野山大学の印が押され、「大正一四年購求」と書かれていた。売却以前は、小林が院長を務める慈善病院済世病院にそれらの蔵書があった。おそらく、病院経営の資金繰りのために売却されたのではないかと推測される。小林の蔵書数は三千冊に及んでいたらしい。
- (2) 同時期に静坐法と呼ばれた身体技法は、他に二木謙三による「呼吸健康法」、藤田靈斎の「藤田式息心調和法」があり、また儒教の実践にも静坐はあった。ただ、本稿で「静坐」と記した場合、特に断りのない限り岡田式を指すこととする。
- (3) ごく初期は患者を仰臥させて治療させており、また催眠術のような形式を用いていたという証言もある(甲藤大器『静坐と老荘』一九一四年、一一―二頁)。
- (4) 当時の健康法紹介本では、「岡田式静坐法」の名前が真っ先にあげられていた(田邊信太郎『病いと社会——ヒーリングの探究』高文堂、一九八九年、五九―六九頁)。
- (5) 岡田虎二郎の伝記には、中西清三「ここに人あり——岡田虎二郎の生涯」(春秋社、一九七二年)や小松幸蔵『岡田虎二郎——その思想と時代』(創元社、二〇〇〇年)などがある。本稿では、これに加えて笹村草家人編『静坐——岡田虎二郎その言葉と生涯』(無名会、一九七四年)を参照した。
- (6) 相馬黒光『黙移』ほるぷ、一九八〇年、二三八―二七八頁。
- (7) 田中聡『なぜ太鼓腹は嫌われるようになったのか——(気)と健康法の図像学』河出書房新社、一九九三年。同様の視座を持つものとして、静坐法を西洋近代の超克を望む「オルタナティブな知」の運動として捉えた小堀哲郎の論考がある(小堀哲郎「坐——岡田虎二郎と岡田式静坐法」田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編『癒しを生きた人々——近代知のオルタナティブ』専修大学出版局、一九九九年)。
- (8) 小林信子編『岡田虎二郎先生語録』静坐社、一九三七年、七頁。
- (9) 鶴見俊輔編『日本のプラグマティズム——生活綴り方運動』久野収・鶴見俊輔編『現代日本の思想——その五つの渦』岩波書店、一九五六年、七八頁。
- (10) 鈴木貞美『生命』で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開』日本放送出版協会、一九九六年、一五三頁。筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、一九九五年、四〇―四一頁。
- (11) 田邊、前掲書。田邊信太郎「生——オルタナティブな癒しとその実践者」田邊・島蘭・弓山編、前掲書、一一―四六頁。吉永進「解説 民間精神療法の時代」吉永進編『日本人の身・心・靈⑧』クレス出版、二〇〇四年、一一―四四頁。
- (12) 前掲の田中、小堀、鶴見の著述は、岡田式静坐法のムーブメントを岡田の死で終わったものとして捉えている。
- (13) 二荒芳徳『岡田先生を想ふ』『静坐』第三巻第十二号、一九二七年。

- (14) 岡田虎二郎に直接師事した静坐法実践者と当時の静坐会の具体的なリストは、田原市博物館編『中原悌二郎と岡田虎二郎——自然の理法・悌二郎をめぐる作家達』（田原市博物館、二〇〇七年）【目録一七七】にまとめられている。
- (15) ここに挙げた人々の中では、逸見斧吉、相馬愛蔵、中原悌二郎、中村彝、田中正造、頭山満が参坐している。中原の芸術活動と静坐の関係については、前掲の田原市博物館編『中原悌二郎と岡田虎二郎——自然の理法・悌二郎をめぐる作家達』を参照。晩年の田中正造は静坐だけではなく、独自のキリスト教思想を展開したトマス・レイク・ハリスの影響を受けた新井奥達とも交流があった（長野精一『怒涛と深淵——田中正造・新井奥達頌』法律文化社、一九八一年。瀬上正仁『明治のスウェーデンボルグ——奥達・有礼・正造をつなぐもの』春風社、二〇〇一年）。
- (16) 二荒芳徳「国際情勢と国民の修養」小林信子編『静坐の力』静坐社、一九四〇年、六五頁。渡邊八郎「二個の良民」『静坐』第二卷第一号、一九三八年、一〇—一四頁。保坂正康『五・一五事件——橘孝三郎と愛郷塾の軌跡』草思社、一九七四年、一六一—一七頁。
- (17) 森田繁治「信子先生を思う——静坐社の原点を尋ねて」小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年、一七五—一七六頁。
- (18) 実業之日本社編『岡田式静坐法』実業之日本社、一九二二年、一一一頁。
- (19) 実業之日本社の『岡田式静坐法』、岸本の『岡田式静坐三年』、橋本の『岡田式静坐の力』は岡田式静坐法関連本の中でも特によく知られた三冊である（木内浩雅「岡田先生の想い出（四）」『静坐』第二一七号、三頁）。ちなみに岸本は自彊術をやっていた十文字大元と静坐法の身体的効果について論争しており、彼が身体的側面に注目していたことを示している。
- (20) 笹村編、前掲書、三七四頁。橋本五作「岡田式静坐の力」松邑三松堂、一九一七年、二頁。
- (21) 芦田恵之助「静坐と教育」同志同行社、一九三七年【目録一一】。北垣については、武元茂人「明治末く大正期の地理教育改革論——北垣恭次郎の場合」（『社会科学研究』第三四号、一九八六年）を参照。
- (22) 橋本、前掲書、二五頁。
- (23) 保坂、前掲書、一六一—一七頁。
- (24) 今岡信一良「宗教として観たる静坐法」『六合雑誌』第三七九号。一九二二年。小山東助「静坐に関する感想」『六合雑誌』第三七九号。一九二二年。星島二郎「わが信仰生活の新紀元（特に岡山に於けるわが信仰の恩師諸友に告白す）」『六合雑誌』第三八四号、一九一三年。
- (25) 安田財閥の安田善四郎や安田善之助、住友財閥の岩崎野康弥の自宅が静坐会場となった（田原市博物館編、前掲書、一三六—一三七頁）。
- (26) 濟世病院と小林参三郎の詳細については、拙稿「宗教と医学を超えて——濟世病院長小林参三郎の治療論」（『東北宗教学』第七号、二〇一一年）を参照。
- (27) 「濟世病院開院式彙報」第三二六号、一九〇九年。「ハリス氏と小林ドクトル」『六大新報』第三二〇号、一九〇九年。「ハリス博士と濟世病院」『六大新報』第三三三号、一九〇九年。「濟世病院近況」『六大新報』第三五四号、一九一〇年。「濟世病院近況」『六大新報』第三五七号、一九一〇年。「濟世病院だより」『六大新報』第三六〇号、一九一〇年。
- (28) 小林信子「静坐社のあゆみ」小林信子監修『静坐への道』静坐社、一九六三年、四三七—四三八頁。信子の回想による上記の記述には年代や静坐会場に若干誤りがあったらしく、森田繁治が考証して訂正している（森田繁治「信子先生を思う——静坐社の原点を尋ねて」小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年、一七五—一七八頁）。

(29) 真溪涙骨「坐ることに意味を持つ」『静坐』第十三卷第五号、一九三九年。

(30) 当時の今村惠猛の布教方針は、通仏教的・コスモポリタンのであったことが指摘されている(守屋友江『アメリカ仏教の誕生——二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』現代史料出版、二〇〇一年)。今回の目録には含まれていないが、一九〇八年に今村から贈呈された釈宗演の著作(Shaku Soyen, 1906, *Sermons of a Buddhist Abbot*, Suzuki Daisetz Teitaro (trans), Chicago: Open Court) が小林文庫に含まれていることは、今村と小林を取り巻く仏教的雰囲気が真宗的というより通仏教的であったことを窺わせる。贈呈の事実は同書に残された今村のサインから知ることができた。

(31) 一方で、参三郎は静坐によっても宗教的境地が開けると考えていた。おそらく、「安心」に向かう時、宗教も静坐も相互補完的に有効となると考えていたと思われる(蜂屋賢喜代「静坐と宗教」『静坐』第一巻第二号、八一―一五頁)。

(32) 小林信子(みのりの会代表) 編『日本仏教の諸問題』丁子屋書店一九四〇年。講演者は、山辺習学、金子大栄、羽溪了諦であった。

(33) 小林信子、前掲書、四三八―四三九頁。

(34) 小林信子、前掲書、四四〇―四四一頁。ただ、いよいよ明日から静坐を始めようというときに、参三郎が亡くなってしまったため、同じく京都にあった森田療法を採用している三聖病院を紹介されて入院することになった。それでも、「私は小林ドクトルに静坐を教えて頂きたかったですから、ぜひ奥様に教えて頂きたい」といって信子に静坐指導を乞うて、退院後もたびたび静坐社に来ていた。なお、参三郎は森田正馬とは面識があり、小林邸に連れ帰ってしばしば欲談したという(横山慧吾「静坐のご縁結びのこと」小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年)。

(35) 寿岳文章「大正デモクラシーと春秋社」『春秋』第三〇〇号、一九八八年。

(36) 金子大栄「思出の秋……」『静坐季刊』第四五号、二頁。

(37) 小林みどり「仏教人と静坐」『大法輪』第四七巻第九号、一九八〇年、一四八―一四九頁。

(38) 森田繁治(一九九九―一九九三)は教師を務めながら、岡田虎二郎や静坐人の言葉を独自に収集して、語録や事跡の史料批判的な研究を行っていた。その観点から、静坐社のもつめた『岡田虎二郎先生語録』を評価しつつも、問題点を指摘している。森田の資料は他に田原市博物館の「春堂文庫」に『岡田虎二郎先生の研究』と題されたものが所蔵されている。なお、柳田誠二郎は特に戦後になって静坐社と関わりを深め、「静坐」誌にもたびたび寄稿するようになった。また、笹村編「静坐——岡田虎二郎その言葉と生涯」には、続編がある【目録一三六】。

(39) 小林信子が静坐の形式を墨守したことを示す言葉は枚挙に暇がないが、例えば次のように述べていた。「岡田先生の静坐は私の体と心の上にはよりの、途はないと云うことを信じて居ります。岡田先生は能く仰いました。「此要領は一つ違つても大きな問題だから」と……もちろん一つも直す(改良)こともなく、たゞ、さうして正しい姿勢、正しい呼吸の要領を得た上でなまけなで坐りつ、けて居りましたら、小さい人でも大きい人でも誰れ彼れの区別なく、みなそれぞれにほんとに生かされて行くものだと思つて居ります」(括弧内原文、「六月の京都座談会(上)」『静坐』第十巻第八号、二六頁)。

(40) 伊吹武彦「カメレオンの思い出」『静坐季刊』第四五号、一九七三年。龍村平蔵「ある夢」『静坐季刊』第四五号、一九七三年。

(41) 山口益「浄光院様を憶う」『静坐季刊』第四六号。木村毅「蔵書雑談——英訳枕の草子」『日本古書通信』第三九一号、一九七六年、五

- 頁。上田敏夫人の悦子が信子の御茶の水時代の親友であり、それで上田家と親交があった。加えて、上田は一九一五年四月から一四ヵ月京都で单身生活を送るが、この時に信子と非常に親密であつたらしく『定本上田敏全集第十巻』教育出版センター、一九八一年、六七六―六七八頁。
- (42) 五島茂「手むけ」『静坐季刊』第四五号、一九七三年、二頁。五島美代子「おんたむけ」『静坐季刊』第四五号、一九七三年、二頁。
- (43) 玉城康四郎「浄円先生」『自照』第一一六号、一九六〇年、四七―四九頁。西元宗助「解説」足利浄円『坐』星雲社、一九八六年、二七三―二七六頁。
- (44) 岡田式静坐法をそれ以外のものと混ぜ合わせることに對して小林信子は否定的であり、佐藤幸治や佐保田鶴治とはその点で意見を異にしていた。
- (45) 釈宗演立案・鈴木大拙執筆『釈評静坐のすすめ』光融館、一九〇八年、六一―九、二六一―三二頁。岡田は道元を評価することはあつたが、臨済宗にせよ曹洞宗にせよ、同時代の禪者や禪宗での実践を認めることはほとんどなかった（木内浩雅「岡田先生語録」『静坐』二二二―二三号）。
- (46) 笹村編、前掲書、二四〇頁。
- (47) 小林信子「岡田先生の道」『静坐季刊』第三五号、一九七〇年。
- (48) 小林参三郎のハワイ時代については、室田保夫「ハワイ時代の小林参三郎」『社会学部紀要』第一〇二号、二〇〇七年、四九―六九頁）に詳しい。また、木村毅によれば、戦後になつても京都に来る外国人名士の応接を小林信子がすることがしばしばあつたらしく、そうした人々の間で密かに国際的に有名になつていたらしい（木村毅「美しい老人静坐の道をまもつて四十余年——小林信子夫人——小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年、一五九―一六〇頁）。
- (49) 宇津木については、大澤広嗣・中川未来・吉永進「国際派仏教者、宇津木二秀とその時代」『舞鶴工業高等専門学校紀要』第四六号、二〇一一年）を参照。
- (50) 中井玄道や足利浄円が関連した西本願寺の教団改革や信仰革新運動については、拙稿「大正初期浄土真宗本願寺派における教団改革と信仰運動」柴田幹夫編『大谷光瑞——「国家の前途」を考える（アジア遊学一五六号）』（勉誠出版、二〇一二年、一七六―一九三頁）を参照。
- (51) ミラ・リシャルルについては、吉永進「大川周明、ポール・リシャルル、ミラ・リシャルル——ある邂逅」『舞鶴工業高等専門学校紀要』第四三号、二〇〇八年、九三―一〇二頁）を参照。もちろん、信子だけではなく、参三郎とも面識があり、夫妻は小林参三郎と宗教について語ることを楽しみにしていた、と足利浄円は述べていた（山里桂石「医乎僧乎将道人」『布哇タイムス』一九六八年六月一九日付）。
- (52) オーロピンド・ゴシユはインドで生まれ、イギリスで教育を受けた後、インドに帰国して急進的な独立運動グループのリーダーとして活躍する一方で、ヨーガを「発見」して自ら実践、一九一四年頃からフランス領インドにあるポンディシエリでヨーガ教団（アシラム）を形成していた。
- (53) 柴田徹士「静坐と国際色」小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年、七八頁。「小林信子・静坐社年譜」小林みどり編『静坐の道』静坐社、一九八七年、二五七頁。
- (54) Thomas, Clara. 1946. *Canadian Novelists 1920-1945*. Toronto, London, New York: Longmans, Green, pp. 10-11. 木村毅「枕の草紙」英訳をめぐる内外三人の女性』『北米婦女の友』第一巻第九号、一九三二年、四七―五六頁。
- (55) 木村、前掲論文。
- (56) Stirling, Isabel. 2006. *Zen Pioneer: The Life & Works of Ruth Fuller*

- (57) Stirling, *ibid.*, pp. 14-15.
- (58) ゴダード、モレスビー、エバレット、そして『弓と禅』『日本の弓術』で知られるドイツ哲学者オイゲン・ヘリゲル、中国及び日本美術の収集家であり後にヨガの実践者となったジョージア・フォアマンの五人は京都滞在時に親交があり、一九三二年に亡くなったモレスビーを除き、その後も長く交流があった。エバレットに佐々木指月と会うことを勧めたのもゴダードであった (Stirling, *ibid.*, pp. 19-20)。
- (59) 二荒芳徳「国際情勢と国民の修養」小林信子編『静坐の力』静坐社、一九四〇年、六五―七七頁。二荒の国家主義と静坐の関係については、拙稿「岡田式静坐法と国家主義——二荒芳徳を通じて」(『印度学宗教学会論集』第三七号、二〇一〇年、一―二四頁)を参照。
- (60) 佐藤については、片山杜秀『近代日本の右翼思想』(講談社、二〇〇七年、二一〇―二二五頁)でも論じられている。片山は変革的な右翼思想が現在至上主義的な思想へと挫折していく流れの中で行きついた主張として、佐藤の身体論を位置付けている。
- (61) 佐藤通次『身体論』一九三九年、白水社、一四頁。
- (62) 佐藤、前掲書、六頁。
- (63) 佐藤、前掲書、一五―一七頁。
- (64) 佐藤、前掲書、一五五―一九五頁。
- (65) 佐藤、前掲書、一四九―一五〇頁。
- (66) 佐藤、前掲書、六六―六七頁。
- (67) 佐藤、前掲書、二二八―二二九頁。
- (68) デュルクハイムについては、松下たえ子「カールフリード・デュルクハイムの場合——異文化との出会いと体現をめぐって(一)」「成蹊大学経済学部論集」第二四巻第一号、一九九三年、一〇九―一二三頁)を参照。彼の静坐社との関わりについては、小林信子「編集後記」(『静坐』第二三号、四頁)を参照。
- (69) 真偽は定かではないが、木下が小林参三郎や足利浄円を批判的に見ていたことを示す記録もある【目録八】。
- (70) こうした動向に関連する論考はいくつかあるが、数例を挙げると、末木文美士「近代日本の思想・再考Ⅰ——明治思想家論」『近代日本の思想・再考Ⅱ——近代日本と仏教』(トランスビュー、二〇〇四年)はその先鞭をつけたとされ、大谷栄一「近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義」(ベリかん社、二〇一二年)もこうした近代仏教の見直しを明確に打ち出した代表的な著作であり、末木文美士編『近代と仏教——国際シンポジウム第四一集』(国際日本文化研究センター、二〇一二年)は海外の研究も巻き込んだ重要な成果である。なお、「宗教」概念に関する権力的な問題を分析した磯前順一「近代日本の宗教言説とその系譜」(岩波書店、二〇〇三年)は日本においてこの動向を促した一つの起爆剤であり、キーとなる「ピリーフ」概念も磯前に負うところは大きい。
- (71) トマス・ツイード「米国オカルティズムと日本仏教——A・J・エドモンズと鈴木大拙、そしてトランスロカティヴな歴史叙述」桐原健真・オリオン・クラウタウ訳『年報日本思想史』第一号、二〇一二年、一六頁。

静坐社資料目録

【凡例】

1. 書籍は著者名のアルファベット順と発行年で並べ、目録番号を付与した。
2. 表記ルールは以下の通り。
 - ※項目は「目録番号、著者、発行年、書名、発行者、請求記号、備考」の7つ。翻訳書の場合、「訳者」項目に訳者名を記入する。
 - ※著者や訳者が複数いる場合、和書では中黒（・）で区切って、洋書ではアンパサンド（&）で区切って並列表記する。
 - ※編者や監修者の場合、名前の下に「編」もしくは「監」をそれぞれ付加する。洋書では(ed.)あるいは(comp.)となる。
 - ※発行年、出版社の情報がない場合、和書では「不明」、洋書ではunknownと記す。

【雑誌】

『静坐』1927年3月～1961年10月（1-204, 207-303号）。

『静坐季刊』1962年4月～2007年7月（1-180号）。

『眠りの理由』（瑛九の会）1966年～67年（2号、5号）。

Bulletin of Sri Aurobindo International Centre of Education, 12 (1), 1960.

『静坐』は1927年3月～1944年2月（1号～204号）までは毎月刊行され、巻号表記（第1巻第1号～第18巻第2号）も正確に併記されている。次の205号と206号は残念ながら見つけることができず、今回の寄贈された資料には含まれていない。206号で一旦終刊したようだが、その後足利浄円も関わった浄土真宗系の雑誌『自照』第24・25号合併号（全人社、1944年7月発行）の一部が静坐社用に割り当てられて、小林信子が「新発足の喜び」を執筆している。だが、その後の『自照』も発見できず、この発足後どうなったかは不明である。戦後になり、1946年6月に207号、1950年1月に208号が刊行され、1953年5月に209号が再刊されると、以後1961年10月まで毎月刊行された。その後赤字のため休刊したが、小林信子をサポートするために、西元宗助・小松幸藏・柴田徹士・曾我了雲らによって編集部が作られ、1962年4月に『静坐季刊』が発刊された。『静坐季刊』を含めたほぼ完全な『静坐』誌のコレクションが存在するのは今のところ日文研のみであり、大変貴重な資料といえる。

【書籍】

目録番号	著者	発行年	書名	訳者	発行者	請求記号	備考
1	Akiyama, Aisaburo	1930	Sights of Old Capital (舊都名勝記)		Tokyo: Japan Tourist Bureau	DS/897/Ak	「Nobuko Kobayashi」の署名 3rd Edition
2	安藤州一	1911	親鸞聖人の信仰		法蔵館	HM/168/An	
3	安藤州一	1920	生活の脅威に面して		法蔵館	HM/168/An	
4	安藤州一	1931	安心立命の陽明学		顯道書院	HB/113/An	
5	安藤州一	1931	宗教哲学の話		法蔵館	HK/18/An	
6	安藤州一	1939	詩より宗教へ		安藤州一	HK/11/An	
7	安藤州一	1939	陽明学講話		東洋思潮研究会	HB/113/An	
8	青木吉藏編著	1940	木下尚江翁語録第2巻（附其研究）		青木吉藏	KH/271/Ao	
9	麻詩見外	1964	静坐入門記（全）		小松為藏	SC/194/As	
10	浅野靈聖・浅野香代子	不明	日本療術学 下巻—皇道治療		大阪治療師養成所	SC/721/As	

11	芦田恵之助	1937	静坐と教育		同志同行社	SC/194/As	「信子」の署名
12	足利浄園・金子大栄・山辺習学・蜂屋賢喜代・木村毅他	1926	柿の實		不明	GK/75/Ka	
13	足利浄園	1942	坐		同朋舎	HM/168/As	
14	足利浄園	1951	坐の國		自照舎	SC/194/As	
15	足利浄園	1956	開應記		自照舎	HM/168/As	
16	栗津晴嵐	1914	新編妖怪夜話		鈴木書店	KG/745/Aw	
17	Barrington. E.	1926	Glorious Apollo		London, Bombay, Sydney: George G. Harrap	PS/3503/Be	「Nobuko Kobayashi」の署名
18	Beck. L. Adams	1922	The Ninth Vibration and Other Stories		New York: McClelland & Stewart	PS/3503/Be	「To Nobuko Kobayashi with all good wishes from L. Adams Beck, 1922」の献辞
19	Beck. L. Adams	1926	The Splendour of Asia: The Story and Teaching of the Buddha		New York: Dodd, Mead	BQ/872/Be	「From the author L. Adams Beck. Nobuko Kobayashi」の献辞
20	Beck. L. Adams	1928	The Way of Power: Studies in the Occult		New York: Cosmopolitan Book	BF/1411/Be	「Nobuko Kobayashi」の署名
21	Beck. L. Adams	1928	The Story of Oriental Philosophy		New York: Cosmopolitan Book	B/121/Be	「L. Adams Beck. December 1928 Nobuko Kobayashi」の献辞
22	千葉馨	1976	岡田式静坐の真髓(全) 一岡田虎二郎先生の御言葉		竹村和夫	SC/194/Ch	非売品
23	近重眞澄	1926	物		中外出版	HM/9/Ch	
24	Chinmoy	1958	The Mother of the Golden All		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Ch	「To Revered Sister Nobu Kobayashi With High Compliments, Chinmoy 6.3.'60.」の献辞
25	第一家電OA販売株式会社編	1983	岡田虎二郎先生を憶う一講話今岡信一良先生		不明	SC/194/Da	
26	Das, Nilima (comp.) & Sethna, K. D. (ed.)	1978	Glimpses of the Mother's Life		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Da	「Dear みどり、西牟田 挨子 ニーマル・ボッダー 差し上げます。20. Aug. '94」の献辞
27	Day, Frank R.	1906	Princess of Manoa		Sun Francisco and New York: Paul Elder	GR/385/Da	「To Mrs. Kobayashi ? Greetings From」の献辞
28	Dumoulin, Heinrich	1953	The Development of Chinese Zen after the Sixth Patriarch in the Light of Mumonkan	Sasaki, Ruth Fuller	New York: First Zen Institute of America	BQ/9262/Du	「To my friend Kobayashi Nobuko with affectionate regards ??, Gyōsen-an Daitoku-ji Kyoto January. 26. 1956」の献辞
29	The Federation of All Young Buddhist Association of Japan (ed.)	1934	The Teaching of Buddha (The Buddhist Bible): A Compendium of Many Scriptures Translated from the Japanese		Tokyo: The Federation of All Young Buddhist Association of Japan	BQ/4132/Ga	「Nobuko K.」の署名
30	藤田祐慶(靈齋)	1934	人は腹一腹の現代的認識と其の鍛錬法		腹道報皇會	SC/194/Fu	
31	深田淳	1979	静坐六十年		世田谷静坐会	SC/194/Fu	非売品

32	福岡静坐會編	1926	静坐の栞（第2号）		福岡静坐會	SC/194/Fu	第4回岡田式静坐講習会（1926.3.15-25）にて
33	福澤詩磨子編	1935	ラテン名家文選學問のすゝめ		尚文堂	HC/5/Fu	「ママちゃま、？ 六月一日 志ま子より」の献辞
34	二荒芳徳	1941	皇國の道を直視して		湯川弘文社	A/22/Fu	
35	Ghose, Sri Aurobindo	1921	Love and Death		Madras: Shama'a Publishing House	PR/9499/Gh	
36	Ghose, Sri Aurobindo	1922	Ideal and Progress		Calcuta: Arya Publishing House	B/105/Gh	
37	Ghose, Sri Aurobindo	1923	Thoughts and Glimpses		Calcuta: Arya Publishing House	BL/1273/Gh	2nd Edition
38	Ghose, Aurobindo	1953	The Mother		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Gh	「To Nobuko with blessings ??」の献辞 De luxe Edition (First Edition 1928)
39	Goddard, Dwight	1925	A Nature Mystic's Clue		unknown	PS/3513/Go	
40	Goddard, Dwight	1929	The Buddha's Golden Path: A Manual of Practical Buddhism based on the Teachings and Practices of the Zen Sect but Interpreted and Adapted to Meet Modern Condition		London: Luzac	BQ/9265/Go	「To my honored teacher of "still sitting" Mrs Nobuko Kobayashi, with the good wishes of Dwight Goddard」の献辞
41	Goddard, Dwight	1932	Self-Realization of Noble Wisdom: A Buddhist Scripture		Thetford, Vermont: Dwight Goddard	BQ/1105/Go	「To Mrs. Nobuko Kobayashi with the regards of Dwight Goddard」の献辞
42	Goddard, Dwight	1932	A Buddhist Bible: The Favorite Scriptures of the Zen Sect		Thetford, Vermont: Dwight Goddard	BQ/1138/Go	「To Mrs. Nobuko Kobayashi with my regards of the author Dwight Goddard」の献辞
43	Gordon, E. A.	1911	The Lotus Gospel, or, Mahayana Buddhism and its Symbolic Teachings		Tokyo: Waseda University Library	BR/128/Go	
44	Gordon, E. A.	1916	Symbols of "the Way": Far East and West		Tokyo, Osaka, Kyoto, Fukuoka & Sendai: Maruzen	BQ/5100/Go	「Cordially your's E. A. Gordon.」の献辞
45	Gordon, E. A.	1921	Asian Cristology and the Mahāyāna: A Reprint of the Century-old "Indian Church History" by Thomas Yeates, and the Further Investigation of the Religion of the Orient as Influenced by the Apostle of the Hindus and Chinese		Tokyo, Osaka, Kyoto, Fukuoka & Sendai: Maruzen	BR/1065/Go	
46	蜂屋賢喜代	1943	苦の探究		大谷出版協會	HM/168/Ha	
47	蜂屋賢喜代	1979	獨語集		不明	HM/168/Ha	再刊（初版：1941.8）
48	Happer, John Stewart	1934	Japanese Sketches and Japanese Prints		Tokyo: Kairyudo	DS/821/Ha	「With the author ?? Happer」の献辞
49	長谷川卯三郎	1958	医学禪一肚と健康の原理		創元社	SC/194/Ha	再版（初版：1958.9.1）
50	橋本五作	1917	岡田式静坐の力		松邑三松堂	SC/194/Ha	第5版
51	橋本五作	1922	続岡田式静坐の力		松邑三松堂	SC/194/Ha	
52	服部正喬編	1972	岡田文庫目録（附：Great Stone Face）		服部正喬	UP/171/Ha	
53	服部正喬口述	1978	岡田京一氏と岡田虎二郎先生を語る		田原静坐会	SC/194/Ha	小沢耕一速記

54	服部正喬述、 平田秋刀丹田 会編	1982	岡田式静坐法昔ばなし—岡田虎二 郎先生や諸先輩の話など		服部正喬	SC/194/Ha	
55	服部静夫	1912	坐禪と静坐		弘學館・金正堂	HM/177/Ha	
56	Hayes, Helen M.	1930	The Buddhist Pilgrim's Progress		London: John Murray	PL/2697/Ha	Wisdom of the East Series
57	平田内蔵吉	1940	正坐法		山雅房	SC/194/Hi	
58	平田晋策	1926	愚禿親鸞		合掌社	HM/163/Hi	
59	堀切博昭編	1987	従心先生語録（杉田正臣先生）		堀切博昭	SC/194/Ho	
60	堀切博昭	1996	従心先生語録（杉田正臣先生）— 静坐道と自由律句		堀切博昭	SC/194/Ho	
61	堀切博昭	1997	静坐道—従心先生語録		堀切博昭	SC/194/Ho	
62	堀切博昭編	2003	静坐の道—従心先生語録		堀切博昭	SC/194/Ho	『静坐道—従心先生語 録』の補充修訂版
63	細川基博	2002	岡田式静坐法の実践—驚異の威 力！若がり！		東京図書出版会	SC/194/Ho	「謹呈 細川基博」の献 辞
64	Hawthorne, N.	1972	偉大な石の顔	竹本行雄	竹本行雄	KS/218/Ha	「謹呈 竹本行雄 昭 四七、一一、一九」の 献辞 非売品
65	今村新吉述	1925	神経衰弱に就て		日本心靈學會	SC/374/Im	
66	Imamura, Yemyo & Shinkaku, Kaundinya	1932	Hawaiian Buddhist Annual		Honolulu: Inter- national Buddhist Institute, Hawaiian Branch	BQ/2/Im	
67	今岡信一良	1981	人生百年		日本自由宗教連盟	HK/9/Im	
68	伊奈森太郎・ 福田正治編	1941	静坐五十訓		信道會館	SC/194/In	
69	井上嘉三郎	1957	健康と弓—鐸殻集		奈良県弓道連盟	FS/37/In	
70	伊藤尚賢述	1915	呼吸静座法（体力養成叢書第6編）		新橋堂	SC/194/It	
71	岩見護	1955	山雲抄		永田文昌堂	GB/645/Iw	「小林信子様 岩見護」 の献辞
72	岩瀬法雲	1938	第一義の綴方教育		同志同行社	FC/81/Iw	
73	笠原信次	1972	高志乃夜話		新潟県生命共済農 業協同組合連合会	DM/31/Ka	
74	桂利劍	1931	信じてたすかるか稱へてたすかる か		法雷社	SC/194/Ka	
75	甲藤大器	1920	増補岡田式静坐と老莊		森江書店	SC/194/Ka	増補5版（初版： 1914.5.18）
76	川野正一・ 甲斐亮典	1989	杉田正臣先生追悼録		杉田正臣先生追悼 録出版会	GK/131/Su	非売品
77	菊本実編	1981	岡田式静坐法と岡田虎二郎先生語 録集大成		菊本静坐研究所	SC/194/Ki	
78	菊村紀彦	1975	金子大栄一人と思想		読売新聞社	HM/163/Ki	
79	木下尚江	1936	書簡に代へて—妻みさ子の永眠を 語る		木下尚江	GK/74/Ki	
80	木下尚江	不明	病中吟—木下尚江遺稿		木下正造	KG/561/Ki	非売品
81	岸本能武太	1921	岡田式静坐法の新研究		大日本文華	SC/194/Ki	
82	Kiyozawa, Manshi	1936	Selected Essays of Manshi Kiyozawa	Tajima, Kunji & hacklock, Floyd	Kyoto: Bukkyō Bunka Society	BQ/4055/Ta	山辺習学による Editorial Note 有り
83	小林みどり編	1987	静坐の道—静坐社創立60周年記念 文集		静坐社	SC/194/Ko	
84	小林信子編	1929	御静坐		静坐社	SC/194/Ko	
85	小林信子編	1940	静坐の力—岡田先生二十年祭記念		静坐社	SC/194/Ko	

86	小林信子編	1942	静坐一はじめての方に		静坐社	SC/194/Ko	
87	小林信子監・小松幸蔵・西元宗助・曾我了雲編	1963	静坐への道—小林信子先生喜寿記念刊		静坐社	SC/194/Ko	
88	小林信子	1979	素晴らしい道、静坐—小林信子遺文集第3冊		静坐社	SC/194/Ko 3	
89	小林信子編	1987	岡田虎二郎先生語録		静坐社	SC/194/Ko	9版(初版:1937.5.17)
90	小林参三郎	1922	生命の神秘—生きる力と醫術の合致		杜翁全集刊行會	SC/194/Ko	
91	小林参三郎	1928	自然の名醫—醫術に應用されたる静坐		静坐社	SC/194/Ko	改版(初版:1924.5.10 @春秋社)
92	小林参三郎記	1976	支那醫學開發に就て愚見を陳べ同仁會を賛し支那人に施したる外科手術成績に及ぶ		不明	SC/511/Ko	『東京医事新誌』1278号別冊(1902)抜刷を、『静坐その二』として静坐社が製本したもの
93	神月微宗	1937	尋牛夜話		圓福寺	HM/178/Ka	
94	Mead, George Robert Stow	1906	The Gnosis of the Mind: Echos from the Gnosis vol. 1		London and Benares: Theosophical Publishing Society	BP/565/Me	
95	南伝太郎	1948	病める哲学徒の手記		臼井書房	GK/83/Mi	
96	Mitra, Sisirkumar	1957	Sri Aurobindo and the New World		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Mi	『Madame Kobayashi with Kindly regard. Sisirkumar Mitra 21.2.60』の献辞
97	三浦関造	1955	人間の秘密—綜合ヨガ		竜王文庫	SC/194/Mi	
98	三宅伊三郎	1967	憧憬と思慕—岡田虎二郎先生と座友		三宅伊三郎	SC/194/Mi	『贈呈 三宅伊三郎』の献辞
99	木雞愚人	1934	岡田虎二郎先生語録		木雞愚人	SC/194/Ok	
100	Moresby, Louis	1927	Rubies		London, Bombay, Sydney: George G. Harrap	PS/3503/Be	
101	森田正馬	1926	神經衰弱及強迫觀念の根治法		實業之日本社	SC/361/Mo	
102	森田繁治編	1966	静坐遺訓と私観—伊奈森太郎氏記録		不明	SC/194/In	『静坐』60号、80号からの抜粋
103	森田繁治編	1966	岡田虎二郎先生説話—松田寿蔵氏ノートの研究		不明	SC/194/Ma	『静坐』16号、17号からの抜粋
104	森田繁治編	1966	岡田先生参坐録—佐保田鶴治氏記録		不明	SC/194/Sa	『静坐』26号、27号、127号からの抜粋
105	森田繁治編	1967	青年時代の岡田先生—伊奈森太郎氏記録		不明	SC/194/In	『静坐』36、38、39、41、43、44号からの抜粋
106	森田繁治編	1967	静坐が生れるまで、その他—井上嘉三郎氏記録		不明	SC/194/In	『静坐』20、44号からの抜粋
107	森田繁治編	1967	逸見斧吉氏日記、相沢肇氏日記		不明	SC/194/He	
108	森田繁治編	1967	岡田虎二郎先生 青年時代の知友		不明	SC/194/Mo	
109	森田繁治編	1967	岡田虎二郎先生 地下千萬丈の心		不明	SC/194/Mo	
110	森田繁治編	1967	岡田虎二郎先生の二宮翁事蹟の探究		不明	SC/194/Mo	
111	森田繁治編	1967	岡田虎二郎先生語録—白熊生、渡辺氏、久保田氏記録		不明	SC/194/Mo	
112	森田繁治編	1967	磯菜かご—木下尚江翁遺稿		不明	SC/194/Mo	
113	森田繁治編	1968	甲藤大器翁著「静坐と老荘」から(一)		不明	SC/194/Ka	
114	森田繁治編	1970	実業之日本社岡田式静坐法(二)		不明	SC/194/Mo 2	
115	森田繁治編	1970	実業之日本社岡田式静坐法(一)		不明	SC/194/Mo 1	『王陽明の説』(1枚)を付す

116	森田繁治編	不明	岡田先生語録その他一麻蒔見外氏記録		不明	SC/194/As	
117	中川与之助	1948	女性宣言		関書院	EF/71/Na	
118	Nakai, Gendo	1937	Shinran and His Religion of Pure Faith		Kyoto: Shinshu Research Institute	BQ/8749/Na	
119	中村幹治 (風香)	1960	静坐五十年		不明	SC/194/Na	
120	中村風香述	1936	一静坐子としての坐禪儀解		不明	SC/194/Na	
121	中村天風	1994	運命を拓く一天風瞑想録		講談社	US/51/Na	
122	中根佐一郎	1966	健康禪一心身一如の健康実践法		創元社	SC/194/Na	
123	中西清三	1962	静坐法の創始者岡田虎二郎		春秋社	GK/113/Na	
124	西勝造	1930	西式強健術と觸手療法		實業之日本社	SC/194/Ni	
125	西田天香	1926	○		中外出版	HR/111/Ni	
126	西元宗助	1978	宗教と教育のあいだ		教育新潮社	FC/97/Ni	
127	西元宗助	1986	この世を生きる		百華苑	HM/168/Ni	
128	西元宗助	1962	念佛者の人生論		百華苑	HM/168/Ni	
129	西元宗助	不明	ただ南無阿弥陀仏一人間が人間になるために		百華苑	HM/168/Ni	
130	奥園克己・山田輝彦	1980	麻生塾建塾の精神／森鷗外思想		北九州田母澤会	KG/571/Ok	北九州田母澤会叢書第1集
131	Ozaki, Yei Theodora (ed.)	1903	Japanese Fairy Tales		New York: A. L. Burt	PL/749/Oz	
132	小沢耕一編	1971	岡田虎二郎先生五十年祭記念講演記録		田原静坐会	SC/194/Oz	
133	小沢耕一編	1978	岡田虎二郎伝		田原静坐会	GK/113/Oz	
134	小沢耕一・森下勲	1972	岡田虎二郎先生より令弟井上嘉三郎氏宛書簡集		田原静坐会	GK/113/Oz	
135	Rolland, Romain	1923	Mahatma Gandhi: mit einem Nachwort Gandhi seit seiner Freilassung		München und Leipzig: Rotapfel-Verlag	DS/481/Ro	署名あり
136	笹村草家人編	1988	静坐一岡田虎二郎その言葉と生涯(続)		東京静坐会	SC/194/Sa	再版(初版:1977.12@無名会)
137	Sastry, T. V. Kapali	1960	Flame of White Light		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Ka	「Pondicherry Asaram. 14 3/60. To "MAMACHAN" with Mother's blessings. From Shanta.」の献辞
138	佐藤幸治	1947	人間総合科学への道一氣とモラル		高桐書院	SC/194/Sa	「謹呈小林先生 願以此功德 普及於一切 著者」の献辞
139	佐藤幸治	1951	人格心理学(心理学全書11)		創元社	SB/131/Sa	「謹呈 小林先生 一九五二・七月 著者」の献辞
140	佐藤幸治	1961	心理禅一東洋の知恵と西洋の科学		創元社	HM/171/Sa	「謹呈 小林参三郎先生 御霊前 一九六一年八月 著者」の献辞
141	佐藤幸治編	1972	禪的療法・内観法		文光堂	SB/237/Sa	
142	佐藤幸治・佐保田鶴治編	1976	静坐のすすめ		創元社	SC/194/Sa	
143	佐藤通次	1955	この道一調和の哲学		元々社	HA/5/Sa	
144	佐藤通次	1960	人生についての談話一青年に贈る思想レーダー		理想社	HA/5/Sa	著者から小林信子への贈呈サインあり
145	佐藤通次	1966	日本の武道		新教育懇話会	FS/37/Sa	
146	佐藤通次	1968	仏教哲理		理想社	HM/51/Sa	
147	佐藤通次	1971	健康談義		新日本春秋社	SC/194/Sa	著者から小林信子への献辞あり
148	佐山昭彦	1995	椅子静坐のすすめ		近代文芸社	SC/194/Sa	

149	Sei Shōnagon	1928	The Pillow-book of Sei Shōnagon	Waley, Arthur	London: George Allen & Unwin	PL/788/Se	「To Nobuko Kobayashi from ? ? L. Adams Beck, December 1928」の献辞
150	Sei Shōnagon	1930	The Sketch Book of the Lady Sei Shōnagon	Kobayashi, Nobuko	London: John Murray	PL/788/Se	Wisdom of the East Series
151	静坐社編	1929	吾師之塔—岡田先生十年祭記念建之		静坐社	GK/113/Wa	
152	静坐社編	1977	大船に乗った気持ちで坐る—第五十回夏期静坐実習会講演集		静坐社	SC/194/Ka	
153	静坐社編	1978	本来の自己に帰る—第五十一回夏期静坐実習会講演集		静坐社	SC/194/Ka	
154	静坐社	1984	静坐入門 (小林信子遺文集第1冊)		静坐社	SC/194/Ko	2版 (初版: 1976.11.28)
155	静坐社編	不明	岡田虎二郎先生語録便覧		静坐社	SC/194/Ok	「岡田虎二郎先生語録」第5版 (S32.8.25) の見出し語集
156	静坐社青年部一同	1963	小林信子先生の言葉 (一)		静坐社青年部	SC/194/Se	中外日報の連載をまとめたもの
157	石龍子	1912	性相講話 (全)		性相学会	HR/511/Se	5版
158	Shinran Shōnin	1921	Buddhist Psalms	Yamabe, S. & Beck, L. Adams	London: John Murray	BQ/8722/Ya	「To Mr. And Mrs. Kobayashi.」の献辞 Wisdom of the East Series 書き込み多数あり
159	Shinran Shonin	1935	Shoshinge: The Hymn of True Faith	Itsuzo Kyogoku	Itsuzo Kyogoku	BQ/8749/Sh	
160	姿勢研究所編	1967	姿勢と健康 (姿勢と生活1)		国勢社	SC/194/Sh	
161	曾我了雲	1984	雲になって—曾我了雲追悼集		曾我まり	GK/129/Ku	曾我了雲 (七回忌) 追悼集
162	曾我了雲	不明	岡田式静坐法		不明	SC/194/So	
163	シュリーオロピンド	1962	聖なる母	金谷熊雄	オーロピンドソサイエティ	HB/175/Gh	木村秀雄教授贈
164	Sri Aurobindo Ashram (ed.)	1931	Conversations with the Mother		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Co	「To Nobuko Kobayashi」の献辞 No Copy is Genuine without the Number and The Mother's Signature, No. 343
165	Sri Aurobindo Ashram (ed.)	1953	Le rôle des fleurs		Pondicherry: Sri Aurobindo Ashram	BL/1273/Ro	
166	Sri Aurobindo Ashram (ed.)	1983	An Eternal Birth in Human Time: A Pictorial Life-sketch of the Mother		Pondicherry: Sri Aurobindo Society	BL/1273/Et	
167	須賀隆賢	1924	全法然		春秋社	HM/153/Su	
168	杉田正臣編著	1980	瑛九抄		「根」発行所	KC/229/Su	瑛九 (画家・写真家、本名杉田秀夫) は杉田正臣の弟
169	Suzuki, Daisetz T.	1930	Studies in the Lankavatara Sutra: One of the Most Important Texts of Mahayana Buddhism, in which Almost All its Principal Tenets are Presented, Including the Teaching of Zen		Routledge	BQ/1727/Su	To Mrs. Nobuko Kobayashi with my good wishes. Kyoto, June 1930.
170	Suzuki, Beatrice Lane	1931	Shingon and Mt Koya: With Kobo Daishi's Poem and Rev. Shoken Akizuki's Article on "Anjin in Shingon"		Eastern Buddhist Society	BQ/8999/Su	

171	Suzuki, Daisetz T.	1934	The Training of the Zen Buddhist Monk		Kyoto: Eastern Buddhist Society	BQ/9294/Su	
172	Suzuki, Daisetz T.	1934	Essays in Zen Buddhism (third series)		Luzac	BQ/9266/Su	
173	Tada, Kanae	1934	The Praises of Amida: The Buddhist Sermons of K. Tada	Lloyd, Arthur	Bukkyō Bunka Society	BQ/5345/Ta	
174	多田政一	1936	綜統醫學通説		日本綜統學術院	SC/21/Ta	A. Yauaita. May 1926
175	田原静坐会編	1969	岡田虎二郎先生写真帖		田原静坐会同人	GK/113/Ta	増補復刊
176	田原静坐会編	1990	岡田虎二郎先生七十年祭に捧げる言葉		田原静坐会	SC/194/Ok	
177	田原市博物館編	2007	中原梯二郎と岡田虎二郎一自然の理法・梯二郎をめぐる作家達		田原市博物館	KB/91/Na	田原市博物館◎平成19年春の企画展
178	Takahashi, Takeichi & Izumida, Junjo	1932	Shinranism in Mahayana Buddhism and the Modern World		unknown	BQ/7380/Ta	
179	高島米峰	1926	女		中外出版	EF/71/Ta	
180	竹島茂郎	1921	静坐と人生		目黒書店	SC/194/Ta	
181	田中俊英	1934	典坐教訓新釋		光融館書店	HM/172/Ta	
182	東京静坐会編	1991	一生の静坐—柳田誠二郎先生白寿祝賀記念文集		東京静坐会	SC/194/To	
183	鶴嶺高等女學校編	1936	静坐の勤行		鶴嶺高等女学校	SC/194/Ts	非売品
184	上野陽一	1938	坐の生理心理的研究		正信同愛会	SC/194/Ue	
185	上野陽一	1947	能率道講話 (上野陽一著作集2)		産業能率専門学校	US/51/Ue	
186	梅原真隆	1926	家		中外出版	HM/168/Um	
187	Utsuki, Nishu	1937	The Shin Sect: A School of Mahayana Buddhism		Kyoto: Publication Bureau of Buddhism Books, Hompa Honganji	BQ/8715/Ut	
188	Utsuki, Nishu	1937	Life of St. Shinran		Kyoto: Publication Bureau of Buddhism Books, Hompa Honganji	BQ/8749/Ut	Honganji Pamphlets No.1
189	山邊習學	1939	心身鍛練之書		東洋経済出版部	SC/194/Ya	著者の献辞あり
190	山邊習學講述	1943	豊草原神風和記講義		大谷出版協會	HL/31/Ya	著作権者：籙含雄
191	山鹿旗之進編	1911	はりす夫人 (Life of Mrs. Flora Best Harris)		教文館	GK/442/Ya	「To Dr. S. Kobayashi with ? good wishes M C Harris. March 1912.」の献辞
192	山名義順	1967	聴法の華々		山名蓉子	HM/163/Ya	非売品・遺稿
193	柳田誠二郎	1970	一生の静坐—岡田先生五十年祭記念講演		不明	SC/194/Ya	
194	柳田誠二郎	1980	一生の静坐—柳田誠二郎先生米寿記念出版		東京静坐会	SC/194/Is	
195	柳田誠二郎	1984	岡田式静坐の道		地湧社	SC/194/Ya	
196	柳田誠二郎	1985	日日新たに—柳田誠二郎先生講和録		不明	SC/194/Hi	
197	柳田誠二郎	1988	大道を歩みて—柳田誠二郎先生満九十五才御誕生祝賀静坐会講話		不明	SC/194/Ta	
198	柳田誠二郎	1989	静坐の力—柳田誠二郎先生満九十六才御誕生祝賀静坐会講話		不明	SC/194/Se	
199	柳田誠二郎	不明	静坐の道		不明	SC/194/Ya	
200	柳田誠二郎	不明	語録釋義 (稿)		不明	SC/194/Ya	
201	楊一鴻	1989	禪道與再生—静坐二十年		楊一鴻	SC/194/Yo	
202	横山慧吾	1969	静坐提唱—静坐と森田療法		牛臥病院	SC/194/Yo	改訂第5版 (初版: S39.7.1、改訂第4版: S43.1.20)

203	横山慧吾	1983	静坐療法—心身に苦悩を抱く人々のために		創元社	SC/194/Yo	第3版（初版：1974、2版：1975）
204	全日本能率連盟人間能力開発センター	1975	静坐への道—岡田式静坐法		全日本能率連盟人間能力開発センター	SC/194/Se	